2022年12月29日（木）

緒方医院院長、相良村教育長

緒方俊一郎 先生

ヒアリング記録

水俣市のすぐお隣り、相良村で生まれ育った緒方先生が、どのように水俣と出会い、積極的に関わり続け、医師として水俣のできごとをどのように考えているかをお話しいただいた。

主　　催	水俣から學ぶティーチャーズネットワーク
共　　催	（社）環不知火プランニング
助　　成	熊本みらい基金
協　　力	食・農・人総合研究所リュウキンカの郷　代表・本田節
聞　き　手	神戸市立小学校　竹中美香子、（社）環不知火プランニング　代表・森山亜矢子
コーディネーター	（社）環不知火プランニング　代表・森山亜矢子

緒方医院院長、相良村教育長

緒方俊一郎 先生

ヒアリング記録

SAMPLE
SAMPLE

2022年12月29日(木)

内容:水俣市のすぐお隣り、相良村で生まれ育った緒方先生が、どのように水俣と出会い、積極的に関わり続け、医師として水俣のできごとを医師としてどのように考えているかをお話しいただいた。

森山:今日はお忙しいところをありがとうございます。1時間ぐらいお話を聞かせてもらってよろしいでしょうか。水俣と出会うきっかけは、原田先生と出会う前にあるように思いますが。

緒方:大学に入った(1963(昭和38)年11月に三井三池の炭塵爆発が起きました。

九大一内科教授「勝木司馬之介氏」は、熊本大学内科教授として昭和33年から35年まで熊本大学の内科教授として熊本大学の水俣病研究班に所属していたので水俣病の研究にもタッチしていました。この人が、専門課程の時に臨床講義で三井三池のＣＯ中毒患者さんを連れてきて、説明をしてくれました。(5年生の時、中枢神経＝脳に後遺症を残している患者さんを目の前にして説明をしたのです。)

炭鉱爆発事件の前ですが、教養課程を終えて、医学部に移った際(３年生)に サリドマイドの障害児支援グループが早稲田大学からやってきて、サリドマイド児についての報告をし、救援活動をしていることを話してくれました。大変なことが起こっていることを知り、同様の活動を九州でもやろうかと話が出て、支援活動に参加した。

その頃は、いろんな問題が起こっていて、薬害問題、例えばスモン病をはじめ(風邪薬キセナラミン事件)クロロキン、その他いろいろな薬害問題が起こっていたし、またベトナることは、まあ知っていたわけです。そして、5年生の時に 1968年カネミ事件が起こったのです。でその時に授業で講義をした九大の皮膚科の講師が、「実は俺はごく最近変な病気が出てきたことを知った。発熱や身体のだるさを訴えたり、黒いニキビができたりろ

んな症状が出る病気が起こっている。その原因物質も自分としてはほぼつかんだ。しかし、もっと症例をたくさん集めて それを学会でどかんと発表して、名前を売りたい。」というようなことを言ったのです。その言葉を聞いて「それはおかしいのではないか？」おかしなこと言うなと思ったのです。「医者であればそういう病気が発生しないように世間に知らせる、少しでも早く社会に知らせる」ということが、大事なんじゃないのと同期の仲間と考えました。

実は、戦後の医師養成課程はGHQの指令により、6年間の大学課程修了後１年間無給で病院での実地修練（インターン）をして後に国家試験を受けるという制度が取り入れられていました。先輩たちが長年反対運動を続けてきたのですが、僕らの卒業する前の年から 医学部を卒業し、１年間インターンをやったのちに国家試験受ける制度がなくなり、卒業と同時に医師国家試験を受験できるという制度に変わったのです。しかし、それに変わる卒後研修制度を国が作っていなかったのです。そこで自主的に研修をやろうとカリキュラムを自分たちで作ってやり始めた。医学部ではそのインターン闘争の中から全国的に学生運動がおこり、その中で「東大の闘争」があったわけです。九大医学部でも呼応する形で、インターン廃止運動に参加し、「学問は、誰のためにあるのか」「医療はどうあるべきか」と。患者のために我々は医者になろうとしているのに医学部はどうもおかしいのではないかということで、外科研究棟と言われていた建物一棟を封鎖し、先輩の医者や研究者たちが出入りできないようにしてしまい、大学の教授会と医学や医療の問題について話し合いをしました。

そういう運動の最中、1969年に米軍基地に帰ってくるファントムが墜落した事件が発生しました。学生たちは「機体を象徴としてそのまま残せ」と主張し、討論会やデモをやりました。そう言った運動のさなかに我々の年代から卒業と同時に国家試験を受けて医師のライセンスが取れるということになり、私たちの学年は6月に医師免許を取ったのです。

私は医師免許を取るとすぐ原田正純先生のところに「水俣病について教えてください」とお願いしに行ったわけです。当時、先生は講師でした。熊大では昔の精神神経科の木造研究棟におられた。「俺のとこに来るよりも水俣に行って直接患者さんの話を聞きその状況を見せてもらって、診察させてもらえ」と言われたんです。その時は僕一人で原田先

SAMPLE SAMPLE